

タイトル 『真理と方法』における理解と遊び

副題 理解の経験と表現的本質をめぐる試論

氏名(所属) 宮崎勝正(北海道大学)

本発表の目的は、H.G.ガダマーの『真理と方法』における理解に関する議論を、遊びの概念との関連性から把握することである。

ガダマーは、芸術の存在論を展開するための立脚点として、遊びの概念を導入している。そこで人間の遊びの活動は、「自己呈示(Selbstdarstellung)」という遊びの本来的な存在様式によって記述される。それは、遊びとして生じる都度の出来事とそこに与する遊び手のふるまいとが不離一体の事実として遊びの存在を形作るという、遊びの基本的な在り方を示したものである。人間の遊びにおいて、遊びの出来事は遊び手の意図や行為を含み込み、遊びの運動がその遊びの展開を自ら秩序立てるという仕方で行進する。そして、遊び手の参与を通じて具体化された個別的な顛末として自らの在り方を顕にするのである。

こうした遊びの存在論的な記述は、ガダマーによる芸術作品の説明のための基礎概念として機能しているだけでなく、『真理と方法』における哲学的解釈学の議論全体において重要な意味を持っていると考えられる。そのため、遊びに見出されたいくつかの本質的な特徴との関連性に依拠して、『真理と方法』における諸議論を読み解くことは、ガダマーの哲学的解釈学を適切に捉えるうえで意義のあることだと思われる。ここでは、理解(Verstehen)に関する議論を扱う。何かを理解しつつ生きるという人間の根本的な在り方をめぐるガダマーの議論を、遊びの概念との関連性において読解する場合、理解の営みのいかなる特徴が際立たせられると考えられるだろうか。本発表は、遊びの概念に依拠することによって、何かを理解するという経験について詳しく記述し、理解の営みの本来的な表現性を明らかにすることを意図している。

自己呈示という遊びの存在様式において、遊びは遊び手に対する優位性を持っている。ガダマーによれば、遊びは遊び手の意図を超えたものとしてそれ自体で展開するのであるが、この遊びの優位性は参与する遊び手の経験のなかにも反映されている。そこで遊び手の経験を特徴づけているのは、賭けとリスクの要素である。ガダマーにとって、遊びに参与することは、遊び手が特定の選択に自らを賭けるということを要求する。遊び手は、自身の意図を超えてそれ自体で展開するような遊びの出来事のなかにあつて、なお自らの望む結末を目指して都度選択を行なう。そこでその者が遊びに参与する者であることの条件とは、特定の選択を行なうことによって、自らの期待が裏切られる可能性へと自らを投じることである。選択を自らに引き受けず、したがって、自身の意図の裏をかかれるリスクを背負わない者は、その遊びを遊ぶことができないのである。

こういった自らを賭けるリスクは、理解の営みにおいても本質的な要素として見出されると考えられる。ガダマーは、何かを理解することとは、自らの先入見を危険にさらすことであると論じている。したがってガダマーは、遊びに参与する遊び手の経験と同様の特徴が、理解行為にも見出されると考えているように見える。ここでは、遊びの場合と同様に、特定の先入見に自らを賭けるということが、理解が生じるための条件として想定されていると考えられる。そうであるならば、何かを理解するときの我々の経験の在り方は、ガダマーが遊びに参与する者の経験について与

えた説明に基づいて、より詳細に記述することができるだろうと思われる。我々は、自らの先入見を絶えず危険にさらすことによってのみ何かを理解することができるのである。理解の過程に参与することは、自らの先入見が絶えず裏切られるという可能性に身を置くことを要求するのである。また他方では、特定の者がそのようなリスクに身を投じるということによって、ある物事理解は、一つの具体的な意味を生むのであると考えられるだろう。こうした理解の在り方を、特定の選択に自らを賭けるという遊び手の経験との関連性から、具体的に記述する。

さらに、以上のような考察の遂行は、理解の営みの本来的な表現性に関する示唆へと通じていると考えられる。遊びの概念と理解の営みを関連づけて論じる場合、遊び手の経験を含み込みつつ実現される場所の、遊びの最も基本的な特徴が問題になると思われる。それは、自らを呈示するという性格であり、一つの現実化された出来事であることに由来する、純粋な外部への表現としての在り方である。自己呈示としての遊びの本質は、ある遊び手が参与し、その者の都度の選択を含み込みながら特定の結末を迎えることによって、一つの確定した個別的な出来事として自らを表示することにある。ガダマーにとって、具体的な出来事として現実の場に表現されるということが、遊びの在り方そのものなのである。したがって、遊びの概念と理解の説明を関連づけて考えるかぎり、理解の営みのなかに遊びの概念が含意している呈示的性格を見出しうるのかについて考究する必要があると思われる。ガダマーは、理解に見出される本質的な側面として、適用と解釈について論じているが、この適用と解釈という理解と不離一体の要素は、具体的な状況において現実化される、一回的で個別的な出来事という、遊びの概念の表す特徴と関連しているように見える。そこではまた、ガダマーが理解をその言語性から特徴づけているという事実が、理解の表現的本質との関連性から把握されうるだろうと予想される。このように、本発表では遊びの概念と理解の説明の関連性を模索することで、理解の経験の持つ特性を具体的に検討し、その呈示的な性質を明らかにすることを試みる。